

# 宇宙創生期ロボットの旅：前史 3 編

スタニスワフ・レム<sup>\*</sup> 訳 野口幸夫<sup>†</sup>

2006 年 9 月 23 日

## 目次

1	かくて世界は破滅を免れた	1
2	トルルの機械	6
3	みごとな青あざ	14

## 1 かくて世界は破滅を免れた

ある日のこと、宙道士トルルはナニヌネノで始まるものならなんでもつくれる機械を組み立てた。作業がおわると、彼は試しに、ネジをつくってみると命じ、ついで南京木綿とネグリジェをつくらせ、それができると、こんどは長ぎせるに詰めた悩み忘れの涅槃薬をはじめとする名高い眠り薬のかずかずをつくってみると命令した。機械はこれを一言一句にいたるまで実行した。それでもまだ機械の性能に十全の信頼のおけない彼は、次々と命令を出した。虹。ぬかるみ。熱核兵器。ニュートロン。ナフタリン。のどぼとけ。人魚。沼の精。ナトリウム。最後のひとつはできなかつたので、トルルはかなり頭にきて、説明を要求した。

「そういうものは聞いたこともありません」機械は言った。

「なんだと？ ただのソーダ、ソジウムだぞ。ほれ、金属で、元素のひとつで……」

「ソジウムならサ行で始まるものです。わたしはナ行で始まるものしかつくれません」

「しかしラテン語でいえばナトリウムだ」

「いいですか」機械は言った。「もしわたしが、どこの国の言葉でもかまわずにナ行で始まる事物すべてをあやつれるとしたら、わたしは『五十音でいえることならなんでもできる機械』というこ

---

<sup>\*</sup> ©Stanislaw Lem

<sup>†</sup> 季刊 NW-SF 13 号 (1977/10) pp.9-29

とになってしまいます。なぜなら、どんな事物でも、どこかの国の言葉では、ナ行で始められるでしょうから。世の中、そんなに甘くはありません。わたしはあなたのプログラムした以上のことをすることはできないのです。ですからソジウムはだめなのです」

「よし、わかった」と言ってトルルは、こんどはぬばたまをつくれと命じ、これはたちどころにできあがった 規模はいくぶん小ぶりながらも、申しぶんない夜闇であった。ここに至ってようやくトルルは、親友の宙道士クラパウチュスを招待し、機械にひきあわせた。その際に彼があまりにながながと、機械のずばぬけた性能を自慢したので、クラパウチュスもいささかカチンときて、だったらひとつ拙者にもそいつをテストさせていただこうじゃないか、と言い出した。

「なんなりとご随意に」トルルは言った。「ただし、ナ行で始まるものにかぎるぞ」

「ナ行？」クラパウチュスは言った。「よかろう、では『なべて』をつくっていただくか」

機械がくうんと鳴ったかと思うと、またたくまにトルルの家の前庭には博物学者がひしめいていた。学者たちは議論をたたかわせた それぞれが分厚い論文を刊行し、おたがいに他の者の書物を引き裂きあう。距離をおいて見ていると、積みあげられた薪に火がつけられ、なべてのものの造り主への殉教者たちが火あぶりにされているのが見てとれた。雷が落ち、煙が奇妙なきのご型の柱となって噴きあがる。みんな口々にどなるばかりで、他人の意見を聴く者はなく、ありとあらゆる種類のメモやアピール、召喚状など、書類・文書がやたらとみだれとび、すこし離れた片隅で二、三人の老人が、それらを熱心に切り刻んで紙屑をこしらえている。

「どうだい、なかなかいけるんじゃないかい？」鼻高々にトルルは言った。「これぞまさしくなべてのもの。さあどうだ、参ったか！」

だがクラパウチュスは納得しなかった。

「なんだね、いったいあの騒ぎは？ まさかあれを、なべてこの世の本質だなどと、そんなことを言うつもりじゃあるまいね？」

「なら、なにかほかのものを要求するがいい」トルルは鋭い口調で言った。「なんなりと、勝手に言うがいいさ」一瞬、クラパウチュスは、なにを要求すればいいのか、途方にくれた。しかししばらく考えたのち、彼は機械にふたつのことをさせよと声明した。それができたら、トルルの主張がすべて正しかったと認めてやろう、と。トルルがこれに同意すると、すかさずクラパウチュスは、なりたらずをリクエストした。

「なりたらずだって!？」トルルは叫んだ。「いったい全体、なりたらずとはなんのことだ？」

「なりあまりの逆さ、もちろん」クラパウチュスは涼しい顔で答えた。「逃げ腰だとか、写真のネガだとか、まあそんなようなものだよ。まさか、負の存在なんて初耳だ、とは言うまいね。さあ、機械、スタートだ！」

機械はしかし、すでに作業を開始していた。機械はまず、反陽子をつくり、ついで陽電子と反中性子、反中間子をつくると、営々刻苦、これら反物質すべてを組み合わせる反世界をつくりはじめ、

造営なかばの反世界がふたりの頭上に、幽霊のようにぼうっと白く光りだした。

「はてな」クラパウチユスが不興げにつぶやいた。「これがなりたらずだと？ ふむ……まあ、そういうことにしておこうか、平和のために……だが、もうひとつ、三番目の要求があるぞ。機械よ、なすべきことは、なにもなし！」

機械はじっと動かなかった。クラパウチユスは勝ち誇って両手をこすりあわせたが、トルルは言った。

「はて、なにがお望みだったのかな？ 貴公はこの機械に、なすべきことはないと言い、機械はなにもしなかった。なにか不服でもあるのかね？」

「これは異なることを。拙者はこやつに、なすべきことは『なにもなし』だと言ったのだ。なすべきことがない、と言ったのではない」

「『なにもなし』とは、なにもせぬことではないか！」

「これはしたり。こやつは『なにもなし』をなすべきところを、なにもせなんだ。よってこの勝負、拙者の勝ちだ。『なにもなし』とはな、わが敬愛する賢明なる朋友よ、のんべんだらりの無為無策、なまけっぱなしの無能力、二束三文の代物のことにはあらずして、能動的な、熱意あふれるなにくわぬ顔、すなわち、並みなみならぬ、にべもない、ぬかることなきニヒリズム、またいいかえれば如是一切空、似たものを知らぬ、ぬきんでた、並ぶものなき、名づけえぬもの、のっぺらぼう！」

「貴公、機械を混乱させようというのか！」トルルは叫んだ。

しかしそのとき、思いがけず、金属の音が鳴りわたった。

「よくもまあ、あなたがたふたりは、そんなに口論ばかりしてられるものですね！ ええ、ええ、わたしだって『なにもなし』のなんたるかぐらいは心得ていますよ、なにくわぬ顔も、ニヒリズムも、如是一切空も、名づけえぬものも、のっぺらぼうも。奈落、入滅、なれのはて、ナ行で始まるものならなんでも。ナはなきもののナ。ほらほら、この世の見おさめですよ、おふたりさん！

まもなくこの世はなきものとなり……」

ふたりの宙道士は愕然とし、口論を忘れた。機械がいま現実に、『なにもなし』の状態をつくりはじめていたのであった。それはこういう具合である　ひとつまたひとつと、さまざまなものがこの世から離れ、離脱した品々は、はじめから存在しなかったかのごとく、存在するのをやめていくのだ。機械はすでに、のらあやないとぜぶ、のく、ねく、なりいれいかあ、ねおとりいむ、のんまるりがあを、処分してしまっていた。しかし、時折、機械は間引き、減らし、削除するだけでなく、また同時に、収支の台尻を合わせるかのように、増やし、加え、付けたしてもいるようだった。人非人、捏造、なんじゃらほい、肉親遺棄、逃げ口上、ならず者、煮え湯、難詰、男色、縄張り根性。だがしばらくすると、世界はやはり決定的に、トルルとクラパウチユスの周囲からもうすれはじめた。

「なんてこった！」トルルは言った。「無茶苦茶なことにならなきゃいいが……」

「心配には及ばんさ」クラパウチュスが言った。「だって、ほら、こいつはのっぺらぼうの宇宙をつくっているのではなくて、ナニヌネノで始まるものを非在化しているだけなんだから。大いなる無と比べたら、こんなものは無に等しい。そしてそんな卑小な無こそ、トルル氏、貴公の機械に似つかわしいのさ！」

「いいくるめようたって、そうはいきませんよ」機械が答えた。「たしかに最初は、ナ行で始まるものを扱うことから始めましたが、それは、それらが手慣れたものであったからにすぎません。ものを創造するかぎりにおいてはそうでも、破壊することとなれば、これはまったく別物です。わたしは世界を、インク消しのように消し去ることができます。その理由は単純明快、わたしがナ行で始まるものならどんなものでも、ことごとく　ことごとくとは、つまり、すべて、一切を　とり扱えるからにすぎません。『なにもなし』もまたナ行で始まるもののひとつ。わたしにとってはなんでもないこと。あと一分をへずして、あなたが存在を終えるでしょう、ほかのすべてのものとともに。ですから、さあ、クラパウチュスさん、わたしに言いなさい、早く、わたしはかくあるべくプログラムされたすべてであると、まことに、真に、すべてであると、さあ、手遅れにならないうちに」

「しかし　」と抗議しかけて、だがこのとき、クラパウチュスは思い知った。どれほど多くのものが現実に消滅しつつあるか、を。しかもそれは、ナ行で始まるものだけではなかったのである。ふたりの宙道士の周囲には、もはや、芻食も、はとやにも、ブドンも、慢実も、さんするも、銀星も、囚子もないのであった。

「やめろ！　まけた、前言取り消し！　思いとどまってくれ！　ストップ！　『なにもなし』にするのはやめてくれ買」クラパウチュスは絶叫した。だが機械が完全に停止するまえに、こぬか嵐と氷油、ゆるばしりと青道帯が、すべて消滅してしまっていた。ようやく機械がぴたりと静止し、微動だにしなくなったとき、世界はまさに惨状を呈していた。ことに空は無残なものだった　光を放つものはほんのわずか、ぽつんと孤立してあるばかり　いまの今まで地平線を飾っていた、あの壮麗な銀星と青道帯が、もうあとかたもないのであった！

「ガウス大聖！」クラパウチュスは叫んだ。「芻食はどこへ行ってしまったのだ？　わがいとしの、お気に入りの囚子は？　あの優美な青道帯は？」

「それらはもはや存在しません、二度と存在することはないでしょう」平然と機械は言い放った。「あなたがたの指令に従って、わたしが処分しました。いや、むしろ、処分はまだ手をつけかけたばかりです……」

「拙者はただ、『なにもなし』をなせ、と言っただけなのだ、それを……それをおまえは……」

「クラパウチュスさん、ご自分を実際以上の白痴によそおうのはおよしなさい」機械は言った。「もしわたしが、本格的に、一挙に、『なにもなし』を実行していたなら、すべてが存在を終えていたでしょう、トルルも、空も、宇宙も、あなたも　そしてわたしも。そんなことになっていたら、

誰が証言するのです、誰が認定するのです、命令は遂行されたと、わたしが有能で実効的な機械だと？ 言う者もなく、聴く者もなく、どうやってわたしの、あのいわれなき汚名をそそぐことができますしょう？」

「よし、わかった、拙者の疑義は撤回しよう」クラパウチュスは言った。「もうこれ以上質問も要求もしないから、たったひとつ、頼む、お願いだ、機械君、どうか青道帯をもとに戻してくれたまえ、あれがないと人生はまるで味気ないものになってしまう……」

「だめです、それはできません、あれはサ行で始まるものですから」機械は言った。「もちろんわたしは濡れぎぬや脳軟化症、尿道結石、妬み、なまけ者なら、回復できます。しかし、ナ行で始まるもの以外は、いかんともいたしかねます」

「拙者は青道帯が欲しいのだ！」クラパウチュスはわめいた。

「残念ながら、青道帯はだめです」機械は言った。「ようくこの世界をごらんください。なんと虫喰いだらけなのでしょう。ぽっかり口をあけた大きな穴ぼこ、隙間がいっぱい、無がいっぱい、まばらな星と星の間は、底なしの虚空、虚空を満たす無がいっぱい、われわれの周囲にあるものすべての裏には、べったりと無が貼りついている、すべての物質の断片の背後に、ほら、黒々と、ぬっとそびえたつ無。これがあなたの注文品ですよ、うらやましい！ まあ、未来の世代がこの注文のことで、あなたを讃えるとは、ちょっと思えませんけれども……」

「たぶん……それには気がつくまい、たぶんわかるまい」同僚のトルルの眼を正視できずに、暗黒の空無の宇宙を呆然と見上げながら、蒼い顔でクラパウチュスはうめいた。ナ行で始まることすべてをなしうる機械のそばに友を残して、クラパウチュスは逃げるようにその場を去った。かくして、まさにこの日より、世界は、清算の途中で一休みしたまま、あまたの無で蜂の巣状になったのであった。また、その後、他の文字で始まるものすべてを自由にあやつれる機械を建造しようとする試みがないわけではないが、それらがことごとく失敗に終わっているおかげで、われわれは、遺憾ながら、二度とふたたび、あの銀星や青道帯のような、すばらしい現象を見ることは望みえないのである。そう、二度とふたたび。

## 2 トルルの機械

今はむかし、宙道士トルルは、八階建ての思考機械を建造したことがあった。組み立てが完了すると、トルルは機械に、白いペンキで上着をきせ、ふじ色のふち飾りをあしらい、数歩さがってすかし見たあと、正面に小さな渦巻きをつけ加え、ちょうどひたいと思われるあたりに幾つか薄いオレンジ色の水玉を画きたした。すっかり上機嫌になった彼は口笛をふき、こうした場合の恒例として、機械に、二たす二はいくつ、と形ばかりの質問をした。

機械は小さく身じろぎをした。真空管が熱くなりはじめ、コイルが温まって、全回路に電流が滝のように流れこみ、トランスがうなりをあげて脈をうち、あちらでガタゴト、こちらでポッポ時ならぬこの騒鳴に、さすがにトルルも、これはひとつ、特別製の頭脳用消音器でもとりつけたほうがいいのか、と考えはじめた。その間にも機械はなおも、まるで宇宙最大の難問でもつきつけられたかのように、うんうん呻吟し続けた。土台がゆらぎ、震動で基礎の砂がずれ、シャンペンのコルク栓のように弁がポンポンふっとび、過負荷で継電器がイカレそうになった。トルルの忍耐が極に達したとき、遂に機械はギーッと急停止し、雷鳴のような声でひとこえ発した。「七！」

「ばかだな、おまえは」トルルは言った。「答は四だ。ちっとはおとなしくして頭を冷やせ！ さあ、二たす二はいくつだ？」

「七！」はじけるように機械は叫んだ。トルルは嘆息し、せっかく脱いだ作業衣をまた着ると、袖まくりして、機械の底のはね上げ戸を開けてもぐりこんだ。さてそれから、今は六階、次は八階と、金属の梯子をバタバタ踏み鳴らしながら昇っては降り、あちらを叩き、こちらを締めつけ、そちらをハンダで固め直すと、長い長い時間、手直しをして回った末に、ころがるように底までおりてスイッチを入れた。とたんに、内部のどこかで、シューッと音がして、点火プラグからいっせいに青い火花の髭が生えた。二時間後、煤煙だらけになりながらも心は満ち足りて出てくると、彼は修理器具を取り片付け、作業衣をぬぎ、顔と手をきれいに拭いた。そしてそのまま立去りかけたが

というも、疑念のあろうはずもなかったからだが 思い直して軽い気持で、訊いてみた。

「さて、二たす二は？」

「七！」機械は答えた。

トルルは余聞をはばかりれるすさまじい悪態をついたが、そんなことでどうなるうはずもないそこでやむなく、またしても機械にもぐりこみ、接続を切って修理、調整、点検と、さんざん突つきまわしたあげく、三たび、二たす二はと問うて、七と答えられたトルルは、遂に絶望して機械の底にへたりこんでしまい、クラパウチュスに発見されるまでそのままの格好でうずくまっていた。発見されたとき、まるで墓の底からでも救出されたかのような、そんな表情を見せたので、いったいどうしたのかとクラパウチュスに訊かれ、トルルは事の経過を説明した。そこでクラパウ



チユスも自身で二度、中にもぐりこんであれこれと修理を試みたあげく、一たす二はと問うたところ、六と答が返ってきた。一たす一はというと、零と答える。クラパウチユスは頭を掻きむしり、咳ばらいして言った。

「友よ、こりゃお手上げだぞよ。これはつまり、貴公の企図した機械ではないのだ。しかしまあ、どんなものにもなにかしら、ひとつぐらいはとりえがあるものだ　この代物にもな」

「どんなとりえが？」土台に腰をおろしていたトルルは、そう言いながら土台を蹴った。

「やめて下さい」機械が言った。

「ふうん、こいつ、生意気に、感覚はあるんだな。ええと、なんの話だったっけ？　ああ、そうそう……こいつがトンマな機械であるのは間違いない。それも、そんじょそらの、並み大抵のトンマじゃない、いやまったく！　こいつは、そう、拙者の判ずるところ　これでも拙者、この道では、専門家のはしくれなんだからな　こいつは世界最愚の思考機械だ、いやはや、こりゃ軽々には扱えんぞ！　その気になってつくろうとしたって、そうは簡単につくれるもんじゃない。いや、実際のところ、不可能と言っていい。なにしろ、こいつ、トンマなだけじゃなくて、なんともはや強情だ　この強情さというやつ、白痴に共通する特性で、白痴というのはどれもこれも、類を絶して強情なものなんだ」

「いったい全体、そんな機械に、どんな用途があるというんだ!？」と言ってトルルはまた、機械を蹴った。

「よしたほうが身のためですよ！」機械は言った。

「ほう、こいつ、警告しとるぞ」とこれはクラパウチユス、無味乾燥に所見を述べた。「過敏で愚鈍で強情なばかりか、気が短いときた。これだけたくさん特性があれば、こりゃあ、ずいぶんいろんなことができるぞ！」

「たとえば？」とトルルが訊くと、

「そうさな、ちょっと一口には言えんが。見世物に出して入場料をとったらどうかな。史上最愚の思考機械でござい、客はわんさか集まるぞ　何階あるって言ったっけ、これ？　八階？　いやはや、これ以上図体のでかい低能を、いったい誰が想像できるね？　それに、見世物に出せば、経費がとりもどせるばかりじゃなくて　」

「もういい。見世物なんてお断りだ！」こう言ってトルルはぷいと立ちあがると、むしゃくしゃするのを抑えかねて、またもや機械に蹴りつけた。

「もうこれで三度目の警告ですよ」機械が言った。

「なに？」機械の声の調子の横柄さに思わずカッとなって、トルルは叫んだ。「この野郎……くそっ……」わめきながら、めった蹴りに蹴りつけた。「蹴られるだけしか能がないんだ、貴様など。ええ、わかったか？」

「あなたはわたしを四度、五度、六度、八度、はずかしめた」機械は言った。「したがってわたし

は今後、数学的問題にはいっさい返答を拒否します」

「拒否します、だと！ おい、聞いたかよ？」トルルはすっかり頭にきて、あたりかまわずどなりちらした。「六のつぎが八だとさ聞いたか、クラパウチウス？　七じゃなくて八だとさ。数もろくろくかぞえられずに、この大先生、数学は拒否します、とさ！　これでもくらえ！　ほれ！　ほれ、これでいくつだ？　え、なんです、先生、もっとご所望あそばされるって？」

機械は震え、ゆらぎ、無言のまま、土台からむっくり起きあがりはじめた。土台の杭は根が深く、そのうえ、ひきぬくにつれて桁材が折れまがりはじめていたが、それでも遂に脚をひきぬき、鉄骨をひきずりながらもコンクリートの土台をばらばらにして、その中から、機械はわが身を解き放った　そしてさながら、動く要塞のごとく、トルルとクラパウチウスに押し迫った。トルルは呆気にとられてしまっていて、まごうかたなく彼を圧砕しようとしているこの機械から、逃げることにすら思いつかぬしまつ。しかしクラパウチウスが腕を掴んでそこから引き出し、あとはもう一目散にふたりは逃げた。ようやくのことに一息ついてふりかえってみると、機械は巨塔のごとくのびあがって身をゆるがしながら、じわじわと前進していた。一步進んではまた二階の高さまで砂地に沈みこんでしまうのだが、それをものともせず、なおも執拗に、バカの一つ覚え、身をひきずりあげて、真一文字に、ふたりめざして這い寄ってくる。

「こんな無茶苦茶な話ってあるものか？」驚きはててあえぎながら、トルルは言った。「だってこれは叛逆じゃないか！　どうすりゃいいんだ？」

「ここはひとまず、様子を見よう」なににつけても用心深い、クラパウチウスはそう答えて、「なにか学びとれるかもしれん」

だが今は、学びとるところの騒ぎではなかった。機械はいまや、ようやく固い地盤にたどりつき、速度を増しつつあったのだった。内部で、ヒュー、パチン、ポーッ、と音がしていた。「もうそろそろ、安全装置が働きだすころだ」荒い息をつきながら、トルルは言った。「そうになったら、プログラミングが膠着して、あいつ、止まるはずなんだが……」

「いや、そうはいかんぞ」クラパウチウスが言った。「これは並みの事態じゃない。あいつはひどいトンカチだから、安全装置がどんなに信号を出したって、気がつきはしないだろうよ。だが気をつける!!」

機械は今、突進の勢いを増す構えにでていた。はずみをつけて、明らかに、一気におしつぶしてしまおうというのだ。全速力でとびのくふたりの耳をかすめて、バリバリと地面を踏みまくる音の、恐ろしいリズムが響いた。ふたりは逃げに逃げた　ほかになにができたろう？　迂回して故郷の地へ戻そうと、努めてみぬわけではなかったが、しかし、退路を断たれ、しゃにむに追いつめられるままに、逃げまどったふたりは、とうとう、とある未開の無人の地へと追いこまれた。ぶきみな険しい山々が、霧の中に、しだいに姿を現わしてきた。はあはあ息を切らしながら、トルルはクラパウチウスに叫んだ。



「いいか！ 狭い谷に逃げこもう……あいつの通れない谷へ……くそっ……貴公の意見はどうだ？」

「いや……まっすぐ行ったほうがいい」ぜいぜいいいながら、クラパウチウスが言った。「たしか、この先に町がある……名前は忘れたが……とにかく、そこへ行けば ふうっ！ なんとか身を隠す場所もあるだろう……」

そこでふたりがまっすぐに行くと、ほどなく前方に家並が見えてきた。時刻が時刻だけに、路上は事実上無人状態で、ふたりの宙道士は誰にも行き会うことなく、ひたすら先を急いだ。と、突然、背後の、町の入口あたりで、山崩れのようなすさまじい破壊音がした 機械は真近に迫っているのだった。

ふりかえって見て、トルルは呻いた。

「なんてこった！ あいつ、家々をひきつぶしているぞ、クラパウチウス!!」断念を知らぬコケの一念、機械は立ち並ぶビルディングをさながら鋼鉄の小山のごとく両側にかきわけて瓦礫の畝をつくりながら押し進んでいるのだった。通った跡には地面が露出し、漆喰の白い粉塵の雲がたなびいていた。悲鳴と混乱の渦巻く街路を、トルルとクラパウチウスは、心臓が口からとびださんばかりに仰天しながらも、走りに走って、やがて大きな市庁舎の前にさしかかると、中へとびこみ、はてしなくつづく階段を一気にかけて、深い地下室へとおりていった。

「もうここなら大丈夫、建物全体がおしつぶされてのしかかってくるまで、下敷きにされる気づかいはまずあるまい」あえぎながら、クラパウチウスが言った。「だがそれにしても、よりもよってこんな日に貴公を訪問したとは、なんたる身の不運……貴公の仕事の進み具合を気にかけてばかりに いや、とくと拝見させてもらったよ……」

「しっ」とトルルが制止した。「誰か来るぞ……」

はたして、地下室のドアが開いて、市長が、数名の市会議員を従えて入ってきた。トルルはこの、いたましくもまた奇怪な事態の経過をどう説明したものが、すっかりまごついてしまっていたので、やむなくクラパウチウスが説明した。市長は終始無言のまま、説明に耳を傾けていた。不意に、壁がぐらぐらと揺れ、地面が大きく持ちあがって、岩の碎ける音が地下室にまで伝わってきた。

「来ているんですか、この上に!？」トルルは叫んだ。

「ええ」市長は言った。「そして身柄を引渡せと要求しているのです。さもないと、全市をひきつぶして平らにならしてしまうと……」

と、そのとき、はるか頭上でわめく声が、ちょうど消音器をつけたラッパのような感じで、響いてきた。

「トルルはここだな トルルの匂いがする……」

「でもまさか、引渡したりなどなさらないうね」機械の盲執的な怨念の対象が、震える声

でそうたずねると、

「あなたがたおふたかたのうち、トルルという名のおかたには、立ちのいていただかねばなりません。もうひとりのおかたはとどまってくだすって結構です、そのかたの引渡しは条件に含まれておりませんので……」

「お慈悲を！」

「まことにお気の毒ですが」市長は言った。「どうしてもここにとどまろうとおっしゃるのであれば、トルルさん、この町と住民とに加えられたいっさいの損失を引き受けていただかねばなりません、あなたのせいで機械はすでに、十六戸の家々を破壊し、貴重このうえない市民の多数をその下に生き埋めにしてしまっているのですから。あなたがここにおられること自体、われわれにとっては差し迫った危難なのです、それ故にこそ、われわれはあなたを無罪放免にするのです。どうぞ即刻、お立ち去りください、そして二度と来ないでいただきたい」

トルルは市会議員たちを見て、そのけわしい顔に記された、彼に対する判決文を読みとると、のろのろと向きなおり、ドアのほうへと歩みだした。

「待て！ 拙者も行くぞ！」衝動的にクラパウチュスが叫んだ。

「なに、貴公が？」と言うトルルの声には、ほのかな希望の色があった。「いや、それはならない……」一瞬おいて、しかし彼はそうつけ加えて、「貴公までが危難にあわねばならぬ理由が、どこにある……？」

「しゃらくさい！」勢いこんでクラパウチュスは反論した。「あの痴愚の鉄塊の手にかかるのが、危難だと？ ばかばかしい！ いいかね、友よ、あいつに思い知らせてやるんだ、ふたりの高名な宙道士を消滅させようなどとするのが、どんなに高くつくことかを！ さあ、行こう、トルル！ 胸を張って！」

友のこの熱弁に元気づけられて、トルルはクラパウチュスを追って階段をかけた。広場には人っ子ひとりいなかった。舞いあがる粉塵の中、粉碎された家々の骸骨めいた鉄骨の残骸のただなかに、機械が仁王立ちしていた。市庁舎の塔よりもなお高く、ポッポと湯気を吐きながら、全身を煉瓦の粉で真赤に染め、石灰岩の粉で白くまだらになって。

「用心しろよ！」クラパウチュスが小声で言った。「まだあいつ、われわれをみつけちゃいない。左手の最初の街路を進んで、十字路で右へ曲り、そのあとはまっすぐ、むこうの山へ逃げこもう。山の中なら、隠れる場所もみつかるだろう。安全な場所で、やつにぎゃふんと言わせるてだてを考えよう。そうすりゃ、いくらあいつが気遣いでも……今だ！」彼はどなった。機械が今、ふたりの位置をつきとめて、舗道の敷石を踏みつぶしながら、猛然と襲いかかってきたのであった。

息もつかずにふたりは町をとびだし、情容赦もなく追ってくる巨像の、雷のような鷲音を背中に聞きながら、二、三キロあまり走り続けた。

「あの谷、見おぼえがあるぞ！」突然、クラパウチュスが叫んだ。「干上がった川の河床で、上流

は両側が崖になっていて洞穴がある　早く、早く、もうちょっと行けばあいつ、立往生するはずだ！……」

そこでふたりはつまづきつまづき、バランスをとるために両腕をふりまわしながら、川上めざして駆けのぼったが、機械はなおも追い迫ってくる。干上がった河床の砂利を這うように登って、ふたりはやがて、垂直に切り立った岩の裂け目の下にたどりつき、はるか頭上に暗く口を開いた洞穴を見つけると、それをめざして狂ったように登りはじめた。足元のもろい岩が崩れ落ちることも、もはや意に介さなかった。岩穴からはひんやりとした空気が吐き出されて、中は暗黒。たどりつくとそのまふたりは中へとびこみ、勢い余って二歩、三歩、踏みこんだところでたちどまった。

「さてと、ここにいれば一応は安全だな」冷静さをとりもどして、トルルは言った。「ちょっと見てやろう、あいつ、どこで立往生しているかな……」

「用心しろよ」クラパウチュスが忠告した。トルルは洞穴の入口までにじり寄っていき、首を出すなり、ぎょっとして即座にとんで戻った。

「登ってきているんだ、あいつ!!」彼は叫んだ。

「心配は無用、ここまでは来られやせんさ」クラパウチュスはそう言ったものの、完全には確信をもてない様子だ。「それにしても、どうしたんだろう？　暗くなってきているようだが？　うわっ！」

この瞬間巨大な影が洞穴の入口の外に見えるわずかな空を塗りつぶし、代わってそこに、鋏を打たれたなめらかな鋼鉄の壁が出現したのだった。機械だ。岩を抱えて、のっそりと迫ってくる……堅牢な金属の蓋でもする調子で、洞穴を封印してしまおうというのだろう。

「袋のネズミだ……」と小声で言いかけたトルルは、そのとき全き闇につつまれて、絶句した。

「白痴なのはこっちのほうだ！」クラパウチュスが怒号した。「わざわざ穴にとびこんで、蓋をさせてしまうとは！　なんでまた、こんな愚を犯してしまったんだろう？」

「あいつ、なにを待っているのかな？」長い沈黙ののち、問いかけたのはトルルだった。

「われわれが降参するのを、さ　待ってるぶんには、オツムが弱くたってさしつかえないからな」

またもや沈黙がおりた。トルルは闇の中を、つまさきだって手さぐりで、壁づたいに入口のほうへと進んでいった。と、やがて、指先が、なめらかな鋼鉄の面にふれた。それは温く、まるで内部から熱せられているかのように……

「トルルが感じられる……」鉄の音が轟いた。トルルはあわてて退却し、友のかたわらに並んで腰をおろすと、そのまましばらくふたりとも、身じろぎもせずすわっていた。やがて、遂にクラパウチュスがささやいた。

「ただすわっているだけというのも能がないな。いっちょ、説得にあたってみるか……」

「むだだよ、それは」トルルは言った。「しかし、ひきとめはせんよ。少なくとも貴公には、解放

される可能性がないわけじゃない……」

「おい、おい、そいつは言いつこなしだぜ！」と言いながら、クラパウチュスはトルルの肩をぼんと叩いた。そして手さぐりで洞穴の入口まで行くと、呼ばわった。「おーい、外のやつ、聞こえるか？」

「ああ」機械は言った。

「いいか、われわれは謝罪をしたい。ええ、その……なんと言おうか、ちょっとした行き違いが、まあ、あったわけなんだが、それはとるにたらぬ問題だ。トルルとしても、なにもきみを……」

「トルルを粉碎してやる！」機械は言った。「しかしまず、トルルに答えてもらおう、二たす二はいくつか」

「もちろん答えさせる、もちろん答えさせるとも、そしてきみはその答に満足して、きっと仲直りできるさ、な、そうだと、トルル？」仲裁役はなだめすかすようにして言った。

「むろん、承知だ……」口の中でもごもごと、トルルが言うと、「ほんとうだな？」機械は言った。「なら、二たす二はいくつだ？」

「よ……いや、な、七だ……」いちだんとかぼそい声になってトルルが言うと、

「ほう！ 四ではなくて、七なんだな、え？」機械は勝ち誇って大歓声をあげた。「それ見ろ、おれの言ったとおりじゃないか！」

「七、そう、七だよ七、七と決まっているんだ！」熱烈な調子でクラパウチュスは相槌を打ち、「で、どうだろう、ひとつ、われわれを外に出してはもらえまいか？」と、ぬかりなく言い添えた。

「だめだ。トルルに言わせろ、申し訳ありませんでした、と。そして答えさせるんだ、二かける二はいくつか……」

「そしたら、出してもらえるのか？」トルルが問うと、

「さあ、どうかな。考えてみよう。取引きはきらいだ。二かける二はいくつだ？」

「でも、まさか、出してやらないなんてことは？」トルルが言いかけると、クラパウチュスが腕をひっぱって、耳うちした。

「こいつは低能なんだ、議論はするな、後生だから！」

「出させたくなければ、出させない」と機械は言った。「おまえはただ、答えればいいんだ、二かける二はいくつか……」

不意に、トルルはカッとなった。

「言うとも、なにもかも言ってやる！」彼は絶叫した。「二たす二は四だ、二かける二は四だ、たとえ貴様がアタマにきて、山をぜんぶ叩きつぶし、海をのみほし、空を食い尽そうとも聞こえるか？ 二たす二は四なのだ!!」

「トルル！ なにを言うんだ？ 気がふれたのか？ 二たす二は七だよ、機械君！ 七だ、七なんだ!!」友の声をかき消そうと、クラパウチュスはがなりたてた。

「ちがう！ 四だ！ 四だ、答は唯一、四だ、四だ、古今東西、千古不易、未来永劫 四だ!!」トルルはわめき、怒号した。と、足元の岩が、熱病にでもとりつかれたようにわなわな顫えはじめた。

機械は洞穴から離れはじめ、ほのかな光が射し込んだかと思うと、すべてを刺し貫くような悲痛な絶叫があがった。

「嘘だ、答は七なんだ！ 七だと言え、言わないとぶつぞ！」

「いやなこった！」トルルはまるで、もうなにがおころうとか激いはしないとでも言わんばかりに、どなった。小石や砂がふたりの頭上に、雨あられと降りそそいだ。機械が、かの八階建ての囚体で、岩壁に体当たりをしはじめたのだった。倦むことを知らず、幾度となく、猛然と山腹にぶつかってきたから、遂にはさしもの山も砕けて、巨石が谷底へと転がり落ちはじめた。雷鳴が轟き、硫黄の匂いが洞穴内にたちこめ、岩にうちあたる鋼から火花がとんだが、しかしそんな大混乱のさなかにも、時折、とぎれとぎれに、トルルのわめき声は聞きとれた。

「二たす二は四だ、二たす二は四だ!!」

クラパウチュスは腕ずくでも友の口をふさごうとしたが、激しくふりとばされて断念し、すわりこんで頭をかかえた。狂気のごとき機械の行為は、一瞬たりとも休むことなく、今ではもう、いつなんどき、天井が崩れ落ちて、ふたりの囚われびとを押しつぶし、永遠に埋葬してしまうか、知れたものではなかった。だがふたりが、もはやこれまでと希望を捨て、空気が毒々しい煙と息のつまる粉塵とでいっぱいになったとき、不意に、ガリガリとすさまじい磨擦音がし、ゆっくりと、いかなる乱打乱撃よりもなお音高い、爆発にも似た音がして、空気がヒューと切り裂かれ、洞穴の入口をふさいでいた黒い壁が、まるで脆風にでも巻きあげられたかのように忽然と消滅し、それに続いて、巨岩ががらがらと、なだれをうって墜ちていった。この山崩れの残響が、まだ鳴りやまず、谷に響きわたっている中、友と友は首を揃えて、洞穴の外に顔を出した。そこには機械の姿があった。うちのめされてながながとのび、八階あるちょうどまんなかあたりを巨岩に直撃されて、まっぴたつになっている。最大限の注意を払い、一步一步足元をたしかめながら、砂塵舞うガレ場をふたりは下っていった。河床まで出るには、どうしても、機械の残骸のそばを通らねばならなかった。それは今、どこか、転覆して岸に打ちあげられた巨艦の遺骸にも似た。ねじくれたその船腹の影のところまでさしかかると、どちらからともなく、声もなくふたりは立ちどまった。機械はまだ、かすかに震えており、その内部でなにかが回転し、小さくきしんでいるのが聞きとれた。

「そうさ、これが貴様の末路なのさ、二たす二は 　むかしから決まって 　」とトルルが言いはじめた、まさにそのとき、機械がかすかに、かろうじて聞きとれるほどのしゃがれた騒音をたて、これを最後に、ひとこえ捻った。「七だ」

そしてなにかが、内部ではじけた。頭上から二つ、三つ、石がふった。いまやふたりの眼前にあるのは、生命のない、スクラップの山にすぎなかった。ふたりの宙道士は無言で目と目を交わし、もうそれ以上なにも語らず、来たみちを戻っていった。



### 3 みごとな青あざ

宙道士クラパウチユスの家の戸を誰かがノックしていた。顔を出してみたところ、玄関に、四本の短い脚をもつ太鼓腹の機械が立っていたので、

「どなたかな、また、なんの御用かな?」と、あるじが問うと、

「それがしは『どんな願いも聞きとどける機械』にて候、貴下の親友にして同僚たるトルル大人のもとより、贈り物としてさしむけられて参りたるものにて候」

「なに、贈り物?」と答えるクラパウチユスの、その心中、トルルに対する思いは、控え目に言っても、愛憎相半ばするものであった。なかでもとりわけ、トルル大人なる言い草には、カチンと来るものがあった、が、小考ののち、彼は言った。「よかろう、はいりたまえ」

そして、機械を部屋の片隅の大時計のわきに立たせたまま、やりかけの仕事に戻った、いまとりくんでいるのは三本の短い脚をもつずんぐりむっくりの機械で、これはほぼ完成しており、あとはただ最後の仕上げを待つばかりになっていたのである。しばらくすると、『どんな願いも聞きとどける機械』は、咳ばらいして、

「あのう、わたし、まだここにいるんですけど」

「忘れちゃおらんよ」顔も上げずに、クラパウチユスは言った。またしばらくすると機械は、咳ばらいして質問した。

「失礼ですが、なにをしてらっしゃるんですか?」

「きみは『願いを聞く機械』じゃなくて、『質問する機械』なのかね?」と言いながらも、クラパウチユス、すぐに続けて、「青いペンキが必要だな」

「色合いとしてはわるくありませんね」と言いながら、機械は太鼓腹のふたをあけ、青い塗料の入ったバケツをとりだした。クラパウチユスは無言で刷毛をそれに浸け、塗りはじめた。二、三時間後、こんどは紙やすりと磨き粉、ハンド・ドリル、白いペンキ、ねじの5号が一箇、必要になり、機械はそのすべてをたちどころにとりだした。やがて夜になると、クラパウチユスは、作品にカンバス布をかぶせ、夕食を済せ、そしてそれからおもむろに、機械の正面に椅子を据えて、切り出した。

「さてと、きみになにができるのか、ひとつ見せてもらおうか。きみはたしか、どんな願いでも……」

「たいていの願いなら、まあなんとか」と機械はつつましやかに答えて、「ペンキと紙やすりと5号ねじはお気に召しましたでしょうか?」

「うん、なかなかよかったよ」クラパウチユスは言った。「しかし、今、我輩がもくろんでおるのは、ちょいとばかり厄介な願望でな。これが叶えられんとなると、きみをきみの主人のもとへ、深



甚なる感謝の意をこめつつも、専門家としての見解を添えて、送り返さねばなくなる」

「承知いたしました。で、その願いとは？」そわそわしながら機械が問うと、

「トルルだ」クラパウチュスは言った。「トルルが欲しい。トルルと生写し、そっくりなやつ、誰にも見分けがつかぬほどのものが欲しいのだ」

機械はぼそぼそ、ぶつぶつ、つぶやいていたが、やがて、「いいでしょう、トルルをつくってさしあげましょう。でもどうか、取り扱いには細心の配慮を払ってください かりそめにも、まことの大宙道士なんですから」

「ああ、もちろんだとも、念には及ばさんさ」クラパウチュスはそう言って、「で、どこにあるんだね？」

「え、いますぐにですか？」機械は言った。「トルルは5号ねじとはちがうんですよ。多少、時間はかかります」

だがほどなく、機械の腹のドアが開いて、トルルがはいでできた。クラパウチュスはためつすがめつ、あらゆる方向から観察し、手で触れ、叩いたが、どこにも不審な点はなかった。それはまさしくトルル 本物のトルルと瓜ふたつなのだった。ただ、このトルル、明るい光に不慣れなのか、ちょっと目をしかめている。その点だけを別にすれば、あとは立居振舞もまったく自然でぎこちなさがない。

「やあ、トルル！」クラパウチュスが声をかけると、

「やあ、クラパウチュス！ だが、待てよ、どうして拙者、こんなところにいるのかな？」いかにも当惑した様子で、トルルは答えた。

「なに、いまそこから生まれおちたばかりなのさ……そうだ、そう言えば、しばらくぶりだな。どうかね、ここが気に入ったかな？」

「いやいや、大いに結構……ところで、そのキャンバス布の下のものはなんだい？」

「大したものじゃないさ。それより、まあ、すわらんか？」

「いや、もうそろそろ、帰らにゃならん。外は暗くなってきているし……」

「なにをそんなにせかせかしている、いま来たばかりじゃないか！」クラパウチュスはひきとめた。「それにまだ、わが家の地下室を見ておらんדר？」

「地下室？」

「そうとも。貴公ならきっと、大いに興味を惹かれるはずだ。さあ、こっちへ……」

とクラパウチュス、トルルの肩に手を回し、地下室へと導いたが、着くが早いか、足をはらい、押さえつけて手早く縛りあげ、大かなてこをとりだしてきて、こっぴどく打ち据えはじめた。トルルは怒号し、助けを求め、ののしり、慈悲を乞うたが、しかしクラパウチュスは加撃の手を休めようとはせず、打擲の音は暗くがらんだ夜の夜に勸した。

「ひい！ ひいっ!! なにゆえ貴公、拙者を打つのだ!!」ふるえあがりながらトルルはわめいた。

「快感がえられるからさ」ふりかぶりながら、クラパウチュスは説明する。「おたくもいつか、やってみることだな、トルル！」言いざま、トルルの脳天に一撃、ふりおろすと、太鼓のようにドーンと鳴った。

「即刻拙者を解き放たねば、王にいいつけて、貴公を土牢の最奥に投げこませるぞ!!」トルルは絶叫した。

「いや、そうはならんさ。なぜだかわかるか？」息をつくためにしばらくすわりこんで、クラパウチュスは問いを發した。

「言ってくれ」なにはともあれ、折鑑の中断につながるものならばと、トルルが応じると、

「それはな、おまえが本物のトルルではないからさ。いいか、よく聞けよ、トルルはな、『どんな願いも聞きとどける機械』なるものをこしらえて、贈り物としてそれを我輩のもとへ寄越したのだ。そこで、そいつをテストするために、我輩が命じて、おまえをつくらせたのさ！ で、我輩はこれからおまえの頭を叩き落して、ベッドの脚にとりつけて長靴脱ぎ器代わりにつかおうという算段なのさ」

「ひとでなし！ なんでそんなことをする？」

「言ったじゃないか、それはもう。快樂のためさ。ええい、おしゃべりなんざ、もうたくさんだ、うんざりするわ！」言うなり、クラパウチュスは立ちあがり、こんどはどでかい棍棒を両手でよいしょと持ちあげた が、そのとき、トルルが叫んだ。

「まて！ よせ！ 話がある!!」

「貴様の頭を長靴脱ぎ器としてつかうのをやめさせようなどと、そんなつもりでいるのなら、無駄なことだぞ」クラパウチュスが答えると、トルルは早口でわめきたてた。

「拙者は機械のつくった贋トルルなどではない！ 正真正銘、ほんもののトルルだ 近頃貴公がドアをしめきり、カーテンを引いて、なにやらこそこそやっているから、そのわけをつきとめてやろうと、機械をつくり、腹の中に隠れ、贈り物と称してここへしのびこんできたまでだ！」

「なんとでもほざけ、見えすいた世迷いごとを！ もうちょっとましな作り話ができんのか！」棍棒をふりあげながら、クラパウチュスは言った。「しゃべるだけ息が無駄になる。貴様の魂胆など先刻お見通しだ。貴様はな、あの『願い叶え』の機械の産物なのだ。あいつはペンキも紙やすりもハンド・ドリルも5号ねじもつくったのだ、貴様をつくれぬはずはない！」

「それらはみんな、あらかじめ腹の中に仕込んでおいたのだ！」トルルは叫んだ。「貴公の仕事にどんなものが必要かを予想するのは、さほど困難なことじゃない！ 誓っていうが、拙者は真実を語っているのだ！」

「では、なにかね、おまえさまは、わが親友にして同僚たるトルル大人を、インチキ野郎だと、こうぬかしはべるのか？ なにをたわけた、我輩は絶対に信じぬぞ！」クラパウチュスはそう答えるなり、「これでもくらえ！」

と、一発くわし、

「よくも、わが親友トルルを中傷してくれたな！ ええいこれでもくらえ！ これでも！」

掛け声もろとも、くわしつづけ、さんざんになぐりつけうちのめしたので、さすがに腕がくたびれて、棍棒をふりまわすこともなぐりつけることもできなくなった。

「さて、このへんで一休みして、眠るとしようか」棍棒をわきにほうりだしながら、クラパウチュスはそう言って、「なに、心配は無用、また戻ってきてやるさ……」言い残して立去ったかを見ると、もう大いびきをかいていた 轟々と鳴り渡るその音は、地下室にいても聞きとれるほどだった。トルルは身をよじり、くねらせて、やっとのことで縄をゆるめ、縛めをとくと、身をおこし、機械のところまで這いずり戻ってなかにもぐりこみ、ほうほうのていで逃げ帰った。この脱出の一幕を、クラパウチュスは、笑い声をもらさぬよう口到手をおしあてて、寝室の窓から眺めていた。翌朝、彼はトルル宅を訪問した。これを迎え入れるトルルはむっつりとして無言であった。室内は暗かったが、それでもクラパウチュスが、トルルの身を彩どる見事なあざを見てとれぬほどの暗さではなかった これでもまだ、トルルとしては、苦心惨憺、擦り傷掻き傷を繕い、でこぼこをならしたうえでのことであるのは、疑うべくもなかったけれども。

「なんでそんなにうかぬ顔をしているんだい？」上機嫌のクラパウチュスはたずねた。「きょう来たのはほかでもない、あのすてきな贈り物への礼を述べようと思ってね ところが、なんと、けしからんことに、あいつ、拙者の眠っておる隙に逃げだしおってな、えらく慌てておったとみえてドアをあけっぱなしにしていきおったよ！」

「どうやら貴公は」トルルはかみつくように言った。「拙者の贈り物をどういう具合にか、誤用したらしい。いや、こう言ってはなんだが、濫用したものと思われる。いやいや、言い訳は無用だ、機械がすべて話してくれたよ。貴公、拙者をつくらせたそうだな、拙者を。そして拙者を、つまり拙者の複製を、甘言を弄して地下室にひっぱりこんで、無慈悲にも打ちすえたそうだな！ そんなひどい侮辱を加えておきながら、悪辣な非礼のかぎりを尽しておきながら、よくもまあぬけぬけと、知らぬ顔でここへ来られたものだな！ さあどうだ、なにか言い分はあるか？」

「なんでそんなに貴公が怒るのか、拙者にはとんと合点がいかんな」クラパウチュスは言った。「たしかに拙者は、機械に命じて貴公の複製をつくらせた。いや実に申しぶんのない、驚くべきそっくりぶりだった、その点に関してはかぶとを脱ぐよ。しかし打槌の件については、機械の申し立てはちょっと誇張がすぎる そりゃたしかに、拙者は人工のトルルを一突きか二突き、こづきはしたけれども、それはただ、できばえを確めようとしたまでのこと、それと、まあ、どう反応するかテストしてやれという気持もあったかもしれんな。いや、見事なものだったよ。しっかりしとって元気はいいし、おまけに、自分は本物のトルルだと抗弁までしおったよ、そんなところを想像できるかね ? むろん拙者はそんなことばは信じなかったが、あやつの誓って言うには、実はこれは贈り物などではなくて、なにやら下劣な、よこしまな計略だ、とこうぬかすではないか。そうま

で言われては、拙者としても、親友の名譽を護らねばならぬ、そうじゃないかね、そこで、恥知らずにも貴公を中傷したあやつをちょっぴりこらしめてやったという次第なのだ。それにしてもあいつ、えらく知能が高かったな。まあ、それもそうだな、トルル、あやつは外形のみならず精神面でも、貴公にそっくりだったんだから。貴公はまさしく、偉大にして高遠なる宙道士だ、それを言わんがためにきょうは朝はやくからこうしてまかりこしたわけだよ！」

「うむ、よし、わかった、それならば」とトルル、かなり機嫌をよくしてそう言って、「ただ、あの『どんな願いも聞きとどける機械』に対する貴公の用法は、やはり、なんと言おうか、幸い多きものではなかったようだ……」

「へえ、そうなのか、実はもうひとつ、訊きたいことがあったんだがな」クラパウチスはまったく無邪気に言った。あの人工のトルル、どうしたんだい？ 会わせてくれないかな？」

「あいつ、激怒のあまり、逆上してしまっただけ」とトルルは説明した。「貴公の家のそばのあの山道で待ち伏せして、手足をバラバラに引きちぎってやる、とこう、えらいけんまくだった。拙者もなんとか、思いとどまらせようとはしてみたんだが、するとこんどは拙者をののしるしまつで、思いこんだら心は盲だ、ありとあらゆる落とし穴を組み立てはじめた。かくなるうへは、クラパウチス君、なるほど貴公は拙者を侮辱したけれども、そこはそれ、昔からの友情に免じて、この拙者、貴公の生命と手足に対するこの脅威を取り除かんものと意を決したよ。そこで、涙をのんであやつを解体し……」

そう言って彼は床にちらばるナットやボルトを爪先でさわると、嘆息した。

それから親愛の情のこもったことばを交わし、握手して、最大の親友ふたりは別れたのだった。

この時以来、トルルはただひたすら、誰彼なしにふれてまわった。彼がクラパウチスに『どんな願いも聞きとどける機械』を贈ると、クラパウチスが、それに命じて人工のトルルをつくらせ、青黒くなるまで打ちのめして、彼を侮辱したのだ、と。そして偉大な宙道士のまことに優秀な複製は、わが身を守らんがために巧妙な嘘をつき、遂にクラパウチスの眠っている隙に逃亡に成功したのだ、と。そこで、トルル、本物のトルルは、人工のトルルが親友にして同僚たるクラパウチスに加えんとした復讐を阻止するために、やむなくそれを解体したのだ、と。トルルはこの話を、何回となく、しかもはしょることなく最後まで、語り、自らの偉業を際立たせ、みがきをかけていった（また、その際には必ず、証人としてクラパウチスが引きあいにだされた）ので、この話は遂には宮廷にまで聞こえたほどで、いまや人は、トルルのことを、つい先頃までは世にも名高い『世界最愚のコンピューターの宙道士』と呼び慣らわしていたのも忘れて、彼のことを語る時には最大の敬意をこめるようになった。ある日、クラパウチスは、王がみずから大いにトルルを称えて『大視差の位階』を授けたと聞きおよぶと、両手をほうりあげて叫んだ。

「なんだって？ 我輩は彼の小さな悪戯を見ぬくことができたから、そのお返しに、すてきな青あざをこしらえてやり、おかげで彼は夜中にこそこそ逃げ帰ってわが身をつくるわねばならぬはめ

になったが、そんなときでも、彼は見栄をはっていた！ そのつじつまあわせのおかげで、彼が称賛され、あまつさえ叙勲までされ、富が雨とふりそそぐとは！ おお時世よ、おお風俗よ！……」

怒り狂って家に帰り、門をおろしてカーテンを引いた。実は彼のつくろうとしていたのも、やはり、『どんな願いも聞きとどける機械』だったのだ。ただ、トルルに先を越されただけなのであった。